

# 宇宙を駆ける少数精鋭企業の技術

日本航空宇宙工業会正会員90社のそうそうたる顔ぶれの中に、従業員数27名の原田精機(株)が堂々と名を連ねています。

宇宙機器産業という新たな産業進出へのターニングポイントや苦心された点などについて、代表取締役・原田浩利さんが飾らない言葉で語ってくださいました。

## 車輪技術を活かした惑星探査機 そしてわずか50kgの人工衛星

「まず御社が手掛ける独自技術や製品についてお聞かせください。」

原田 自動車産業界では、機械の設計製作と試作分野、モータースポーツ分野での仕事を中心に事業展開してきました。

その傍らで自社開発品に取り組み、車輪技術を活かして「惑星探査用車輪」を開発しました。これはインターネッ

トを利用して遠隔操作できる車輪ロボットと解釈してください。通信ソフト開発も自社で完成させて搭載しています。

また大型人工衛星部品を製作し、地道に技術習得と研究開発を積み重ねることで、現在では人工衛星としての構造体と観測用テレスコープシステムが完成の域に達するところまでやってきました。これは自社製人工衛星はまます「SAT」として形となり、観測データを地上に送る際の地上受信機器も併せて開発しています。

## 「田舎侍がお江戸に参上して、 仕官願いに声を挙げたのが最初」

「宇宙産業へ参入するターニングポイントとはどんなものだったのでしょうか。」

原田 一つの産業界でなく幾つかの産業界とおつき合いができれば、景気の

波がそれぞれ違うと考え、模索していました。弊社は切削加工が本業です。で、切削が必要な産業ではきつとお役に立てるはずと支度をしていたわけです。

そして2000年にISOを取得して東京の展示会に出ました。これは田舎侍が「こか土官にしてくれ」と江戸に出ていったようなもの。そうしたら「仕官になるには一手お相手を」ということになり、力を試された。その結果、「これからなさい」と言っていたとき、仕事の内容が人工衛星の製作のお手伝いだったわけです。

「とはいえ、やみくもにアピールしたのではなく、宇宙産業に的を絞った展示だったのでは？」

原田 確かに狙いを持っての出席でした。そのための準備(技術開発および研究資金の投入)は、粘り強くかつ念入りに行っていましたし、実際に充分な手応えを得て、この業界で役に立つ！と思えます。

確信できました。

「新分野の知識や技術の習得はどのように行われたのでしょうか。」

原田 衛星メーカーやJAXAなどの研究機関、大学などで行われる勉強会にはほとんど参加しました。その甲斐あって面白い知識がどんどん増えていき、それでは満足できなくて今では宇宙機器を自社で作ることまで始めてしまったというわけです。

## 産業界の文化の違いに驚愕 No.1を作る！という気概

「新分野参入にあたってのご苦労についてお聞かせください。」

原田 なによりこの宇宙産業のことを全く知りませんでしたので、いちいち「何のために作るのか」を教えてもらいました。おそらく「面倒くさい奴が来たなあ」と思われたことでしょう。しかし懐の深い皆さんが「つちり」と受けとめ

ていただき、そのおかげで「この産業に望まれることは何か」を知ることができました。

「従来手掛けてこられた自動車産業との違いは何かありますか。」

原田 驚かされたのは、産業界の文化の違いですね。宇宙産業では、全てにおいて「チャンピオンを作り続けるのが使命」という点です。なぜなら、宇宙に飛び立ったら最後、誰も直しに行くことができないものづくりだからです。

弊社も自動車産業で究極のエンジンであるF1エンジンを作っていた誇りもあるのですが、衛星の難しい製品には積極的に取り組み、メーカーやJAXAでの評価もNo.1になるように必死で頑張りました。



▲国内外22ヵ国からの出展で盛況となった「JA2012国際航空宇宙展(ジャパンエアロスペース2012)」(名古屋市)にて、同社の惑星探査機「ローバー」(中央)と、人工衛星「はままつSAT」(右上)を展示。

## 日本の先人達が確立した 強いものづくりの文化で勝つ

「今や御社は、サブミクロンの超精密部品から大型プラントまでを手掛けているわけですが、日本のものづくりの勝機についての考えをお聞かせください。」

原田 日本は「技術立国」を目指してきました。先進的で、便利で、精密で、頑強、こうした要素が揃った製品は、例えば過酷な環境に耐える日本車に代表されるように、強いものづくりの文化が成し得た日本製品でした。この日本文化は受け継がれるべきです、今後も目指すは「技術立国」です。

日本でしか出来ない技術をどうやって国内で確立させていくかは、一企業の策では出来ません。中小企業は製品を作るのが精一杯ですし、製品や技術の商品に変えていくのはメーカーの力ですから、相互のノウハウを一体化する必要があります。

資源と内需の小さい日本は、日本特有の製品を国内で作り、そして海外に売っていく。これが日本が生きていく姿だと考えています。

アメリカのシリコンバレーのように復活しなければなりません。世界を見

て「何が必要だろうか?」「何に困っているだろうか?」をとらえ、どんな形でビジネスにするか考える必要があります。その中のコア「核」の事業の何を取るのか、それが今後の企業策ではないかと思えます。

## 裏付けできる高い技術 期待に応えられる 自信と努力を誇りに

「それでは最後にテーマである「つなぐ地域の底力」として、浜松地域において今後もつないでいくべき「精神」「技術」「知識」などについて、お聞かせください。」

原田 浜松地域の工業においては、やはり自動車産業界で多くの知識を得てきたと思います。世界で一番保証でき

る輸送機器を作りだせていることは大いに誇りとするべきです。そこには、裏付けできる高い技術があり、期待に応えられる自信と努力がある。先輩方が好奇心と努力によって創ってきたものづくりの文化を次世代につないでいく、これが自分達の使命であり、「やりたい!」「できた!」「うまく出来るようになった!」「満足」を実行できるようにすることだと思っています。

(取材・文/オフィスオオタ 太田尚代)

時代を先取りし、動かすものづくり  
人と製品の美しい関係を  
Making a Harmony between Human and the Product  
High Technology Enterprise

原田精機株式会社 <http://www.haradoseiki.co.jp/>  
Haradoseiki Co., Ltd. 1430-9104 静岡県浜松市東区東山1-1 TEL 053-438-7341

